



低ホウ素濃度で栽培したシロイヌナズナ（左）では葉の展開が著しく抑制されているが、ホウ素濃度の高い水耕液で育てると野生型と同様に育つ。この変異株の原因遺伝子として、生物界で初めてのホウ素トランスポーターが同定された（三輪京子、藤原徹提供）

農学生命科学研究科・農学部は本郷キャンパスの北側に位置する弥生キャンパスの中に存在する。この地には昔は一高があったが、昭和10年駒場にあった農学部とそっくり場所を交換し、現在の地に移ってきた。以前は、弥生キャンパスはすべてが農学部であったが、現在では地震研究所、分子細胞生物学研究所、文系学部の一部やその他の建物が建てられている。決して広くはないが、農学部の教育と研究の一部として重要な実験圃場や植物育成用のガラス室が残されており、この都会の真中で本郷キャンパスとは違う心の安らぐ風景がまだ残っている。

昨今、クロイン動物、狂牛病、遺伝子組み換え作物、病原性大腸菌O157、輸入農水産物の薬品汚染など食品の安全性や生命観についての話題には事欠かない。また一方で、古くから医食同源という言葉があるように、食品が栄養以外にヒトの体を調節する機能をもつことが話題となっている。このようにわれわれ人間が生きていく基盤をなす部分で農学は深く関わっている。これらすべてが生命科学そのものであり、大学院農学生命科学研究科・農学部の教育と研究は生命科学に基盤を置くことから、数年前に大学院が中心の組織に衣替える時、現在の名称に変更した。

農学はもともと生物を利用した生産の基盤

教育・研究の現場から

大学院農学生命科学研究科・農学部

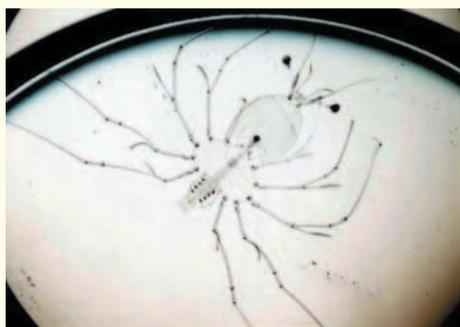
Graduate School of Agricultural and Life Sciences / Faculty of Agriculture

長澤 寛道

大学院農学生命科学研究科・農学部 教授

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/index.html/>

農学生命科学研究科・農学部は本郷キャンパスの北側に位置する弥生キャンパスの中に存在する。この地には昔は一高があったが、昭和10年駒場にあった農学部とそっくり場所を交換し、現在の地に移ってきた。



イセエビの幼生（フィロゾーマ）
写真はふ化後300日目、体長30mmの個体。外洋で浮遊生活を送る。親と同じ姿形の稚エビになるまでに約1年間を要す

を支える学問として発展してきた。農・林・水・畜の一次生産に加えて、その二次的な加工・利用も含めた非常に幅広い分野をカバーしてきた。本研究科は農業経済や行政分野までも含み、自然科学系から社会科学系まで幅広い専門分野の集合体を作り上げている。したがって、地球上の陸も海もすべてが農学の研究のフィールドであり、国際的な視点から研究が展開されている。また、一方では、近年急速に明らかになりつつある動植物や微生物の全ゲノム解析から得られる膨大な情報をもとに新たな生命科学が生まれつつあり、従来からの生命科学とドッキングして新たな局面を迎えようとしている。

このような流れの中で、生命科学の教育研究の充実を目指して旧来の八専攻から新たに二つの専攻（応用生命化学専攻、応用動物科学専攻）が、また特にアジアにおける生物生産と環境の保全を目指した農学国際専攻、本研究科の中のフィールド科学を中心に専攻横断型の生圏システム学専攻が設置され、現在合計十二専攻からなる。農学国際専攻では大学院修士課程の院生は一定期間東南アジア諸国に向いて研究することが課せられている。また、この専攻を中心として副専攻制をとっており、もう一つ別の専攻で学習することも可能になっている。本研究科では、アジアを中心に一七〇



ヤマモモの実（田無試験地）
常緑の高木で暖地の照葉樹林に多く見られ、庭園・公園樹としてもよく植えられる。初夏に熟す直径2cm程の赤い果実は甘酸っぱく、生食の他、砂糖漬け、ジャムなどにする

〜二〇〇名の留学生を受け入れており、アジア諸国の教育研究のレベルアップにも貢献している。本研究科の特徴の一つは、現場教育とフィールド研究のために全国各地に附属施設を有していることである。北海道富良野、千葉、秩父、富士、愛知に広大な面積の演習林もっている。その他、農場、牧場、緑地実験所、水産実験所なども実習や研究に欠かせないものとなっている。

産業界とのつながりは単に卒業生を輩出するばかりでなく、食品分野で五年前から明治乳業株式会社による寄付講座が開設され、昨年はバイオマスの循環型利用を目指して生産技術研究所との共同で株式会社荏原製作所の寄付講座が新たに開設された。農学部正門のすぐ右手には一条工務店の寄付による総木造の弥生講堂が三年前に建てられた。約三〇〇人を収容できるホールは学内、学外関係者に広く利用されている。「二一世紀は農学の時代」といわれている。人口の増加による食糧不足や環境の悪化が懸念されているが、間近に迫っているこの世界的レベルの問題に対して農学への期待がますます高まっていることを思うとき、本研究科はその責任の重さを感じ、農学で培われてきた知恵を大いに活用して、この重役を果たすための教育と研究に一層の努力を傾ける所存である。

一三〇

史料編さん所は、日本史に関する史料の研究、編纂及び出版を行う研究所です。一八六九年の史料編輯事業開始から一三〇年余、一九〇一年の『大日本史料』等発刊から百年余、古代から明治維新时期に至る国内外に残る各種史料を蒐集し、史料研究を通じて、日本史研究の基幹史料集を編纂、出版してきました。二〇〇一年には、史料集発刊百年を記念して、東京国立博物館と共催の特別展「時を超えて語るもの」、史料集編纂国際シンポジウム「歴史学と史料研究」、『東京大学史料編纂所史料集』刊行を行いました。

一〇〇〇

史料の研究と編纂の基礎は史料の調査・蒐集です。百年以上にわたり、全国の史料の複本を蒐集してきました。また、二〇〇二年に国宝に指定された島津家文書など、貴重な史料原本も多数所蔵しています。そして、『大日本史料』『大日本古文書』『大日本古記録』『大日本近世史料』『大日本維新史料』『日本関係海外史料』『幕末外国関係文書』『花押かがみ』『日本荘園絵図聚影』『正倉院文書目録』など、約一千冊の史料集を刊行してきました。

史料学

大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・文化資源学専攻で史料学の教育を行い、大学院



三条西実隆像紙形
レオナルド・ダ・ヴィンチのデッサンを想う。三条西実隆(1455-1537)が1501年に絵師土佐光信に描かせたもの。実隆は室町後期の公卿、当代一流の文人。日記「実隆公記」(重要文化財)と共に本所所蔵

史料編さん所

Historiographical Institute

石上 英一

史料編さん所 所長

<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

史料編さん所は、日本史に関する史料の研究、編纂及び出版を行う研究所です。1869年の史料編輯事業開始から130年余、1901年の『大日本史料』等発刊から100年余、古代から明治維新时期に至る国内外に残る各種史料を蒐集し、史料研究を通じて、日本史研究の基幹史料集を編纂、出版してきました。

情報学環の歴史情報論にも教官を派遣しています。様々な大学から日本学術振興会特別研究員や国内研究員を受け入れ、若手研究者の養成と学術資産の共同利用・研究を進めています。欧米・アジア諸国の研究者・大学院学生を外国人研究員として多数迎え入れています。また、様々な国際研究集会を開催しています。

附属施設「画像史料解析センター」では、肖像画・絵巻物・荘園絵図などの絵画史料、錦絵・古写真などの画像史料の蒐集と分析を進め、歴史学における新分野の研究に取り組んでいます。

一六世紀以来のヨーロッパ諸国の東アジア進出、鎖国と開国などの歴史を明かにして世界史の中に日本を位置付けるために、一九世紀末以来、欧米諸国の日本関係史料の調査・蒐集を行ってきました。近年は、東アジア諸国やロシアの関係機関との交流を深め、これらの国々の前近代日本関係史料の調査・蒐集に取り組んでいます。二〇〇〇年には、大韓民国の國史編纂委員会と学術交流協定を締結しました。

史料保存技術室では、伝統的・創造的な史料写真撮影・絵画模写・文書影写と史料の修補修復の技術により、貴重な文化資産を保存し、研究に利用するための仕事を進めています。このような組織は全国でも珍しいものです。



「南島雑話」(国宝島津家文書のうち)
琉球の綱引きか? 実は、19世紀前半頃の奄美大島の情景

三〇〇〇〇〇〇

大量の史料・史料集の高度利用のために歴史情報研究を推進し、多数のデータベースを公開しています。データは画像ファイルとレコードを合わせて約三百万件です。歴史情報研究拠点構築のために、文部科学省中核的研究拠点形成プログラム「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」(平成二二-一六年度。前近代日本の史料遺産プロジェクト)を推進しています。

二六〇〇〇

図書室では、大量の史料を、国内外の学界、研究者・学生、国民に共有の文化資産として活用していただくよう、公開を進めています。所外利用は年間約一万六千出納回数に及びます。

三

私達は、三つ目の世紀を迎え、心も新たに、学界と社会に開かれた研究所としての発展を目指しています。

赤門を入ってすぐ左、総合図書館と教育学部間の建物です。

赤門の右手の塙の終まる赤レンガ棟は、九〇年前に建てられた建築史上貴重な書庫です。



1千冊の史料集
百年間に編纂・刊行してきた日本前近代史の基幹史料集